如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2007年度冬学期）

講義責任者：山﨑秀記

２００７年１０月２日（火）オリエンテーション
１４時４０分　東２号館　２２０１番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では，産業界等，社会の第一線で活躍されている本学の１２名の先輩の方々が，週１回ずつ（火曜４限）オムニバス方式による講義をされます。

皆さんが，将来の職業選択を軸に大学でこれから何を如何に学ぶかを考える指針となるように，現在第一線で活躍されている諸先輩に，「学生時代に何をしたか」，「社会に出てどういう転機があったか」等自らの体験を交えてお話しいただきます。講師の方々は，自分の歩んでこられた，そしていま歩んでおられるところから，社会を，日本を，あるいは世界を切り取って皆さんにわかりやすく提示し，皆さんが，現代社会とそこでの社会実践のあり方を個別具体的に考える機会を与えてくださることでしょう。

皆さんは，１回きりの講演をただ聞くというだけでなく，先輩の生き方や考え方にふれて触発されたものを質問や感想･意見として返し，ともに考え学ぶ場を作り出してください。

なお，本講義は，如水会および一橋大学の学問風土の活性化を目指して故永井正（２２学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテン・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講　義　日　程

第１回　１０月９日（火）

テーマ：「一橋の精神と風土」
講　師：大澤俊夫　東京商科大学・昭和２７年卒
元ＮＥＣ リース（株）会長

講義内容

一橋大学は，私塾の商法講習所からスタートし，今日のわが国屈指の社会科学の総合大学に発展するまでに至った。しかしその道程は平坦なものではなかった。数回にわたる学園存亡の危機があったが，その都度全学が一致して闘い克服してきた。しかもその間，常に本学はわが国の経済社会の近代化の先駆者として学問と実践の両面にわたって有為な人材を輩出してきた。このような本学の活力を産み出してきたものは何であったか，その「精神と風土」について語り，併せて，本学の建学の精神を体現する言葉「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の現代的意義について言及したい。

第２回　１０月２３日（火）

テーマ：「常識の嘘」
講　師：山田伸二　社会学部・昭和４８年卒
ＮＨＫ 解説主幹

講義内容

経済の世界では，普通皆がそうだと思っていることが実はちっとも正しくないと言うことが沢山あります。例えば「デフレ」がその一つです。小泉内閣時代，小泉・竹中コンビは「デフレが諸悪の根元」だと喧伝し，悪のりしたマスコミはこれに乗って，すっかり世の中の常識になってしまいました。日本の様に，消費者物価が１％前後と言ったマイルドなデフレであれば大騒ぎする話ではなく，実際デフレの下で，戦後，そして，史上最長の景気拡大が続いています。通説・俗説が，いつの間にか「常識」になってしまう落とし穴について，取材を通して考えたことをお話ししたいと思います。

第3回　10月30日（火）

テーマ：「電子立国ニッポンを支える日本の化学企業」
講　師：中原茂明　商学部・昭和41年卒
株式会社トクヤマ　代表取締役社長

講義内容

バブル崩壊後の失われた10年を経て，日本経済は製造業を中心に今，復活を遂げている。
物造り日本として復活を遂げた日本経済の産業構造とその一翼を担った化学企業の現状を，一化学企業に身を置く立場としての目で話をし，今後の化学産業の在り方についても述べてみたい。
それにより，これからの日本の産業界を背負って立つであろう母校の学生諸君に，現在の日本経済の実態と今後も日本経済を支え続けるであろう製造業への理解を深めてもらい，一人でも多くの一橋生に，日本の製造業の発展のために身を投じてもらう事を期待して。

第4回　11月6日（火）

テーマ：「キャリアを通じて成長する」
講　師：安田結子　社会学部・昭和60年卒
ラッセル・レイノルズ・アソシエイツ・ジャパン・インク
マネージングディレクター・日本代表

講義内容

“Captain of Industry”を標榜している一橋大学を選択された学生の方は，卒業後の就職を真剣に意識されている方も多いと思われる。日本における雇用の形態も急激に変化しており，一橋の卒業生の中でも，日本の大企業の枠を超えて活躍の場を見出している方も多い。ビジネス環境がダイナミックかつグローバルに変容している中にあって，今後ご自身のキャリアの形成をどのように考えていくべきだろうか。“仕事”という人生の中の大切な営みを，真剣に考える作業は，就職活動の慌しい時期を迎える前に，是非行って頂きたい。10年以上，エグゼクティブリクルーティングという仕事の中で多くの方のキャリア形成をお手伝いし，また自分自身も失敗と努力を重ねた経験から，現在の状況と検討すべき課題を言及する。

第5回　11月13日（火）

テーマ：「″昇進″・″昇給″と″職を極める″の違い
～M&Aの現場から～」
講　師：吉岡泰士　法学部・平成5年卒
GCA株式会社　シニア・ディレクター

講義内容

大学に入学するにあたり，かつての高校の恩師から「大学生になったら勉学に加え，必ず一つ真剣に打ち込める何かを探せ」，という言葉をもらったことを思い出します。自分なりにその教えを意識して学生生活を過ごしたつもりでしたが，90年初頭の激動の金融界の中で，当事は珍しかった外資系証券会社に就職して以降，その言葉の重要性を思い知らされました。現在，M＆A（企業の合併・吸収）アドバイザーとして会社同士の吸収・合併・買収をお手伝いしておりますが，本講義においては，現職にいたるまでのキャリア変遷と共に，M&Aの対象となる当事会社の社員が翻弄される様も例に挙げながら，”職を極める意識”に目覚めるきっかけを皆さんにつかんでいただければと思います。

第6回　11月20日（火）

テーマ：「弁護士という職業選択」
講　師：大石剛一郎　法学部・昭和60年卒
弁護士

講義内容

私は今，知的障害や自閉症の障害を持つ人に関する虐待事件や刑事事件の弁護活動に力を入れている。自分の意思表示が十分に周囲に伝わらない人たちは，法律場面では極めて疎かにされやすい。そのような人達の問題を考えることで，法律問題ひいては社会全体の問題の本質的な部分に迫れる気がしているのである。大学時代，マクロに注目し，マクロにおける働きかけの結果として，ミクロへの反射的効果を期待する，というのが周囲の価値判断のメインストリームであった。私はその流れからの脱落感を感じて，弁護士という職業を選択した。私は商社マンになりたいと思って一橋大学に入ったが，もしも一橋大学に入っていなければ，弁護士という職業は選択していなかった，と思う。

第7回　11月27日（火）

テーマ：「ポストマクドナルド化社会の職業開拓」
講　師：辻　朋子　法学部・昭和５０年卒
社会学部・昭和５２年卒
中小企業診断士
一橋大学経営協議会委員

講義内容

学生結婚，出産，育児を経て，40 代で診断士資格を取得。大学講師を務めながら，学生参加のまちづくりを通して東京都商工会連合会を統括し，商学公連携事業を推進しています。衣食住，教育，福祉などの流通経路，連携経路を組みかえて，暮らし易さのための地域経営を促すという先人のいない仕事です。

20 世紀はファストフードのマクドナルドに代表される合理性重視の社会とされ，21 世紀は合理性も包含し，人間性回復が見直されるという意味でポストマクドナルド化社会といわれます。診断士といえば企業診断が一般的な仕事。でも，時代の変わり目だからこそ，今，自分が取り組んでいるような“職業開拓”も可能です。仕事を通して感じた，最高の瞬間とは？　“開拓者”になるために大学時代にやれることは？　学生たちとの活動のスライドを交えて，お話したいと思います。

第8回　12月4日（火）

テーマ：「３７０余年の暖簾を受け継ぐために」
講　師：大島千世子　社会学部・平成８年卒
国際企業戦略研究科・平成１８年卒
株式会社　両口屋是清　取締役

講義内容

名古屋における老舗和菓子店，両口屋是清。その創業は寛永 11 年（1634 年），370 余年前にさかのぼります。江戸・明治・大正・昭和・平成にわたる永年の歴史は，その時代の当主のくだした各々の決断の積み重ねによってできあがっています。同様に，13 代目として生まれ育った私も，現在までその大小にかかわらず様々な決断をしてまいりました。

1996 年に卒業して約 11 年。卒業後，富士ゼロックスへの就職。その後，一旦家業に戻りそのあり方を知った後の一橋のビジネススクールでの 2 年間。そして，昨年の表参道ヒルズへの出店準備。

今回の講義では，私自身の今までを振り返って，その時々の決断とその決断を後押ししてくれた多くの方々との出会いについてお話したいと思っております。

9回　12月11日（火）

テーマ：「尊厳を支える自立支援・グループホームの経営
《恍惚の人からクリスティーン・ブライデンまで》」
講　師：吉田佑一　社会学部・昭和４１年卒
株式会社ビアン　代表取締役社長

講義内容

日本における認知症（痴呆症）患者は団塊の世代が高齢者（65 歳以上）になる 2015 年には 250 万人になると予想されている。私たちの誰もが認知症になる可能性を秘めている。祖父母，両親，そしてあなたも決して例外ではない。

有吉佐和子著『恍惚の人』はベストセラーとなり，1970 年代以降の高齢者問題をクローズアップさせた。ある日，痴呆状態となりすっかり別人格となった『恍惚の人・茂造』は小説の主人公でありながら何も発言しない。家族は懸命に介護をするが振り回されて疲労困憊，悲劇の中に幕を閉じる。高齢化社会の到来と共に痴呆性高齢者は病院や施設に隔離拘束，薬漬けにされ，尊厳は保たれず，人間らしさとはおよそかけ離れた晩年を送らざるをえなかった。

1995 年 46 歳のときにアルツハイマーを宣告されたオーストラリア政府の高級官僚クリスティーン・ブライデンは認知症患者の立場から発言を始めた（『私は誰になっていくの？』2003 年翻訳桧垣陽子）。認知症になっても必要なときに適切な支援があれば，尊厳を保ちながらその人らしく暮らしていける。

1985 年頃北欧で生まれたグループホームが日本に上陸したのが 1995 年頃。2000 年の介護保険スタートと共に本格的に普及し始め，今では認知症介護の特効薬とさえ言われている。コムスン事件以降クローズアップされた低賃金と３Ｋの介護福祉業界，介護の人材が逃げていく逆風の中で「尊厳を支える自立支援・グループホームの経営」について考える。。。

第１０回　１２月１８日（火）

テーマ：「問題意識ということ」
講　師：杉崎慎一郎　商学部・昭和４３年卒
日野自動車株式会社　取締役副社長

講義内容

私は，昭和 43 年に卒業しトヨタ自動車工業㈱（現トヨタ自動車）に入社した。トヨタを志望したのは本社の豊田市が私の育った岡崎市 のとなり町という単純な理由からであった。その時はトヨタが今日ほどに発展しようとは夢にも思わなかったが，今にして思えばその発展の背景にはトヨタの底流に流れる「人の育成」ということが大きく寄与していると思っている。すなわち問題意識を常に持ち，問題を共有化し，原因を徹底的に追及し，粘り強く解決してゆく愚直なまでの姿勢を社員に植え付けてきたのである。それにつけても，私が在学中，高島善哉先生の「社会科学論」の講義で先生が口癖のごとく「問題意識を持ちなさい」と言われたことを思い出す。当時はいったいどういうことか理解出来なかったが社会にでて初めてその意味を知ることが出来たと思う。平成 11 年，私は日野自動車㈱に転籍し国立に住んでいるが，私の講義では社会に出てからの心構えの一つとして「問題意識」ということを後輩に伝えて行きたいと思っている。

第１１回　１月８日（火）

テーマ：「コンサルタントとしての会計士業」
講　師：西浦道明　商学部・昭和４７年卒
アタックスグループ 代表パートナー　公認会計士　税理士

講義内容

公認会計士という職業から，一般には，監査法人勤務をイメージする人が多いようです。しかし，本来もっと幅の広いもののはずです。私は，中堅中小企業に対するコンサルタント業として，ささやかですが，アタックスグループを共同創業する道を選びました。大変やりがいのある職業です。そう思う一番の理由は，世の中の「人財の二重構造」の存在です。優秀な学生の多くは上場大企業に就職し，中堅中小企業にはなかなか入りません。したがって，中堅中小企業の最大の悩みのひとつは「優秀な人財確保」なのです。アタックスグループは，「社長の最良の相談相手」をスローガンにしながら，専門家人財（大企業並み）を確保し，人財不足を補うお手伝いをして，その問題解決を支援する役割を果たしています。

第１２回　１月１５日（火）

テーマ：「広告人の炉辺談話―まずは，電通「鬼十則」から・・」
講　師：月﨑博章　経済学部・昭和４２年卒
元株式会社　電通テック　専務取締役

講義内容

ほとんどの同級生が，電通を知らず，広告業の認識もなかった昭和４２年，電通への入社は，私一人であった。

電通「鬼十則」を覚えることからスタート。広告の世界は，単なるサラリーマンでは，やっては行けないと認識し，しかも仕事も家庭も遊びも平行して納得のいく会社人生を送ろうと決意した。

「仕事・家庭・遊び○○主義で○○％ボーイ」「脱サラでなく，○○サラだ」「絶対○○○はしないとは言わない」等々，自分なりに主義や規範を創ってきたが・・・

日ごろ機会があるたびに，後輩たちに話をしてきた生き方や主義，営業センスやマインド，仕事のルールなどを，親父感覚で話していきたい。